



Title	Decolonial Philosophy in Natsume Soseki's Thought: The Limits of Decoloniality within Western Epistemology
Author(s)	Ucles Flores, Hector Benjamin
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105392
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Abstract of Thesis

Name (UCLES FLORES HECTOR BENJAMIN)	
Title	Decolonial Philosophy in Natsume Soseki's Thought: The Limits of Decoloniality within Western Epistemology (夏目漱石の思想における脱植民地主義哲学：西洋認識論における脱植民地主義の限界)
Natsume Soseki is one of the most iconic writers from the modernization period of Japan. Inside his understanding of the past, there is a signaling against the movement for a colonialist project, which is reflected in his affirmation of the present, creating an unresolved contradiction in his theoretical framework. His critique of colonialism focuses on the dissatisfaction that Japanese citizens will experience from becoming Westernized, which, in Soseki's view, is equivalent to becoming a colonial nation. Although his critique addresses the dissatisfaction of the colonizer rather than the suffering of the colonized, his observations on the misguided path of colonialism are assertive and remain relevant. Through Soseki, the bind between Nationalism, <i>coloniality</i>, and westernization can be exemplified as a subalternation or muting of the subject of coloniality, depriving him of the previous cultural tools that are substituted for elements of pretentious universalism, obliging the subject to recreate his own identity, which, if it correctly breaks with coloniality, will refuse an essentialist position. These previous epistemic principles are based on a reality that embraces fiction as its foundation and literature as a method for presenting and conducting truth. Natsume Soseki's natural inclination to decolonial and postcolonial perspectives is bound to his compromise with his expressed epistemology, characterized by its opposition to essentialism. The main regard of the decolonial approach is the demystification of the power that the colonial epistemology presides; this epistemology is categorized as coloniality. When it comes to unveiling coloniality, one of the underlying themes is the interlinking of money, exploitation, and civilization, which is a triad observed and criticized by Soseki. Soseki's characters propose systems that do not generate a proper monetary value, which presents them as dangerous for the structures of coloniality. There is a constant diachroneity between Soseki's intent and his epistemological limitation, which follows a very common trope inside coloniality that decolonial studies verses in unraveling, the permission to think. This problem haunts individuals outside the milieu of Eurocentric identity who pursue the discipline of thought. Soseki expressed his thoughts through allegories to sort out	

this Western epistemological misadventure.

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (UCLES FLORES HECTOR BENJAMIN)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	近藤 和敬
	副 査	教授	野尻 英一
	副 査	教授	MOHACSI Gergely

論文審査の結果の要旨

本論文*Decolonial Philosophy in Natsume Soseki's Thought: The Limits of Decoloniality within Western Epistemology*. は、短い序論と結論を別にして全5章からなる。本論文全体をとおして著者は、夏目漱石という文人を脱植民地主義のコンテクストにおいて一貫して読解可能であることを、テキスト批評の方法論と、脱植民地主義批評理論の諸概念を援用しつつ、漱石自身のテキストや歴史的時代背景を分析することをおして明らかにするものである。文字通り教科書的な夏目漱石理解とは異なり、近年の文学研究においては、夏目漱石の文学が、たんに啓蒙主義的な意図に基づいて書かれたものではなく、脱近代主義的な批判をその重要な点として含むことが明らかにされつつあるが、著者の研究は、それをよりグローバルな視点におき、日本の近代化過程が前提する植民地化への恐怖とそれへの反動から生じる過剰な西洋化への衝動の狭間に漱石の文学の文脈がおかれていたことを明らかにしようとする点に、その学術的意義を見ることができる。

第一章では、「夏目漱石のポストコロニアル的読解：反植民地主義的傾向とその限界」と題して、本書全体の基本的読解方針と、そもそもの前提としてのポスト植民地、脱植民地主義などの批評理論との関係性が概括される。続く第二章では、「脱植民地化作業としての「味の遺伝」」と題されて、日本の伝統的説明が無意味化され、実証的で科学的な説明がそれにとって代わる過程において、漱石がそれをどのように文学作品に落とし込んだかということが明らかにされる。第三章では、「夏目漱石の金銭の穢れについて」と題され、植民地支配が内面化される前兆として、漱石の描写する金満主義的怠惰への批判的描像が、脱植民地的観点から読解される。第四章は「漱石の二分法」と題され、形式上は帝国主義の体裁をとりながらも、実体としては植民地主義的精神を内面化させる日本社会について、漱石が悲劇か嘲笑かの二択のいずれにおいても行き詰まりを見せる思考の経路を明らかにする。終章である第五章では、「植民地主義的思想独占への漱石の対応」と題され、西洋近代におけるマナーの問題を漱石がどのように受け取り、そのうえで、帝国主義を代表する作家として漱石をみる議論にたいして、著者による批判と、脱植民地主義的読解を根拠づける議論が論じられる。総じて、日本文学史の通説にとらわれることなく、帝国主義と植民地の狭間で抵抗する漱石の文学芸術の姿を、脱植民地的読解によって明らかにした点は、学術的にも重要であり、また日本文学理解としても重要な貢献を成すものであると思われる。

著者は、漱石が「西洋化」を固定的実体としてではなく、植民地権力や同化圧力を指す概念として扱っている点に注意深く取り出している。その上で、漱石の資本制批判、権力批判、西洋の模倣にたいする批判を、「植民地性 coloniality への抵抗の傾向」としてまとめ直している。それと同時に漱石が英国の植民地支配そのものについては直接論じないという点などを、漱石の「限界」としても明確にしている。つまり、著者の読解とそれによって描き出す漱石像は単なる「美談化としての反帝国」の文士ではなく、抵抗の契機と非・徹底という矛盾を矛盾したまま提出することで、その歴史的再考の価値と批判的意味を明らかにしているといえる。もっとも本論文は脱植民地主義理論の概念を駆使して漱石のテキストを説得的に読解する一方で、「脱植民地性」と「植民地性」等の中核概念が、各章において具体的にどの記述上の特徴（語りの構造、比喩、人物配置、論述の論理など）に対応するのかという点をいっそう明確化することで、読解枠組みの適用可能性と再現性はさらに高めることができると期待される。以上により、本論文は、博士論文として十分な資格をもち、それに値するものであると評価する。